

## 資料紹介

# 『文学的絶対』拾遺

柿 並 良 佑

### 序——但書

本資料は先だって刊行された翻訳書、フィリップ・ラクー＝ラバルト&ジャン＝リュック・ナンシー『文学的絶対』（柿並良佑・大久保歩・加藤健司訳、法政大学出版局、2023年）への補遺である。同書は1970年代当時、フランスでは十分に知られていなかった初期ドイツ・ロマン主義の文学理論をフランスに紹介し、詳細な「注解」——一般的な注釈にとどまらぬ考察——を付したものであった。文学と哲学、ドイツとフランス、古典古代と近代というように分野も場所もまたぐ同書の射程、さらには散りばめられた戦後フランスの言説空間への目配せなど、原書の刊行からすでに40年以上が経過した現在、ただテキストを置き換えるだけでは今日の日本語の読者にとって不案内な点も少なくないだろうと危惧した訳者により、日本語版にはこれも少なからずの注が加味されることとなった。しかしながらその途上、あまりに詳細に過ぎると判断された箇所は削ぎ落とさざるをえず、と同時に注——とりわけ訳注——なるものが、あらずもがなの身分に甘んじるべき存在である限りはそれも当然の仕儀であった。折しも紙代の高騰が報じられ、ごく物質的な意味でのエクリチュールを容れる器たる書物の製作に際し、経済的利益などとは程遠い大部の翻訳書を刊行するという負担を引き受けてくださった——にもかかわらず訳出作業を長期化させ、同僚の一人からはロマン主義の鍵語を引き合いに「永遠の未完成」と揶揄もされた遅延ぶりによって諸種の苦勞を被らせた——出版社にこれ以上の厄介事を無理強いすることは、あるかなきかの良心がさすがに咎めた。

前口上——すでに原書に *avant-propos* がある以上は「後口上」と言うべきか——は以上にとどめ、あらためて本資料について取扱い上の注意を述べておく。先に触れたとおり、以下は「削除された断片」よろしく雑多な注解の羅列であり、必ずしも文献調査への貢献大なりとは言いが、ごく一部の好事家の興味関心に堪えるものも混在している、という程度に理解されたい。訳書出版前の校正段階に差し掛かってからようやく本格的に参照しえた大部の注釈書（Friedrich Strack & Martina Eicheldinger (hrsg.), *Fragmente der Frühromantik. Edition und Kommentar*, De Gruyter, 2011）が存在する今日、箇所によっては門外漢の勇み足でもあろう走り書きを「資料」の名のもとに公開するのを恥と自覚せぬわけでもなく、とりわけロマン主義者たちのテキストについては専門家の手になる一層包括的な解説に頼むべきことは言うまでもない。一日でも早くその存在意義が消滅することを一読書子として願いつつ、本断片集をあくまで一資料としてここに書き置い

ておく（——こうした所作により、翻訳者という日陰の存在ないし「私」という一個人の吝嗇および怯懦と謗られることは甘受せねばなるまい）。最後に、表記については以下の数点を挙げることでさしあたり十分であろう。

1. 『文学的絶対』の参照にあたっては、ALの略号の後に原書（アラビア数字）／訳書（漢数字）の頁数を記す。
2. 断章への参照は原書と同様、以下の略号によって示す。  
L. = 「批評断章」；Ath. = 「アテネウム断章」；Id. = 「着想集」
3. 主な参考文献については『文学的絶対』での文献表記（AL 31／四一）に従う。また同書で言及したその他の文献についても、書誌情報は簡略な記載にとどめる。
4. 文学史的・伝記的事実については『世界文学大事典』（集英社）、『世界人名大辞典』（岩波書店）の記述に拠ったところが多い。記して感謝する。

#### 削除された注記, その他の断片

日本語版への序

##### iii 頁 「言語論的転回」

通常この表現で指示される潮流とは時期が異なるように思われるが、(13) 頁の訳注43に挙げた記事 « Le souci poétique » で、「ボストンの観察者たちが linguistic turn と名付けたもの」と言われている。

##### v 頁 「ズコウスキー」

Louis Zukofsky (Zukowski), 1904-1978. ロシア語の姓としては「ジェコフスキー」が原音に近い。リトアニア系ユダヤ移民の子としてニューヨークに生まれ、小学校入学までイディッシュ語で育つ。「客観主義派 objectivists」の創始者。長篇詩「A」が広く知られ、エズラ・パウンドに高く評価された。

##### AL 7 / xii 巻頭の詩

ツァハリヤス・ヴェルナー (Friedrich Ludwig Zacharias Werner, 1768-1823) はドイツの劇作家、詩人。ケーニヒスベルクでプロテスタントの家庭に生まれる。大学で法学を学んだのち、ホフマン、アウグスト・シュレーゲルらと交遊。熱烈な宗教心を抱き、神秘思想に傾倒。1807年、公職を退いて創作に専念。同年からドイツ、スイス、フランスの各地を旅行し、ゲーテ、スタール夫人を訪問する。11年、ローマでカトリックに改宗。ハイネが自著で言及している。『ドイツ・ロマン派』山崎章甫訳、未来社、1965年、35頁および178頁以下。

AL 16/一六 「四人での結婚」 mariage à quatre

注にあるアンステットの「序文」はこの表現を文字どおりには論じていないが、ロマン主義における性や女性の解放、「愛の宗教」などについて解説している。Cf. *Lucinde*, p. 24 sq.

AL 18/一九 「理論的实践」 « pratique théorique »

本書が念頭に置いているであろう同時代の「理論的实践 *pratique théorique*」の一例として以下。ルイ・アルチュセール『マルクスのために』河野健二・田村俣・西川長夫訳, 平凡社ライブラリー, 1994年, 243頁以下。

ナンシーは同書および『資本論を読む』の書評を書いた際, この概念に言及している。Cf. Jean-Luc Nancy, « Marx et la philosophie », *Esprit*, n° 349, 1966, p. 1077, 1078, 1085 et 1086.

AL 19/二〇 「党派」 chapelle

例えばコジェーヴはノヴァーリスに言及してこの語を用いている。ドゥニ・オリエ編『聖社会学——1937-1939パリ 「社会学研究会」の行動／言語のドキュマン』兼子正勝・中沢信一・西谷修訳, 工作舎, 1987年, 160頁。

AL 19/二〇 「始まる」 prendre

直前の *reprise* (動詞 *reprendre* に対応する名詞) と連動する。この動詞については同時期にバルトが触れている (ただし新版での増補によると、「固まる」といった意味で用いているようである)。Roland Barthes, *La préparation du roman I et II. Cours et séminaires au Collège de France (1978-1979 et 1979-1980)*, Seuil/IMEC, 2003, p. 328 (1e 2 février 1980). また同講義でバルトは本書に言及している。Cf. *ibid.*, p. 375 (1e 23 février 1980).

AL 19/二一 「酒神の大饗宴のような」 orgiaque

例えば以下を参照。Id. 137, 138. AL 289/四六一。Vgl. *KFS4*, Bd. 1, S. 82, 400, 405, 411, 424, 504; Bd. 23, S. 359. 『ルツインデ 他三篇』, 158頁 (Orgien が「秘密教団」と訳されている)。

AL 21/二四 「自己詩制作」<sup>オートポイエジー</sup> l'autopoïésie

『政治という虚構』邦訳, 174頁参照。フランス語では, いわゆる「オートポイエーシス」には *autopoïésie* が充てられることが多い。なお英訳は *autopoiesy*, 独訳は *Auto-Poiesie* を充てる (*Literary Absolute*, p. 12; *Das Literarisch-Absolute*, S. 27)。

AL 32/四三 「一七八四 ヘルダー『人類歴史哲学についての理念』」

『人類歴史哲学考』嶋田洋一郎訳, 岩波文庫, 2023年より刊行中。

**AL 41**／五七 「思弁的なものの中間休止」

このテキストはヘルダーリン訳『アンティゴネー』のラクー=ラバルトによる仏訳が1998年に再刊された際には収録されていない。

**AL 47**／六七 ベルマンの引用

重複する内容として『他者という試練』邦訳, 157頁(および41頁)を参照。また「一般草稿」767の読み方の一つとして以下。Christian Jany, *Scenographies of Perception: Sensuousness in Hegel, Novalis, Rilke, and Proust*, Legenda, 2019, p. 129.

**AL 49**／七一 「オルガノン」 organon

(19) 頁訳注29に加えて, 以下をも参照。ラクー=ラバルト『メタフラシス——ヘルダーリンの演劇』高橋透・吉田はるみ訳, 未来社, 2003年, 51頁。

**AL 51**／七四 「形成と陶冶」 formation et façonnement

後者の語について, 『ハイデガー——詩の政治』邦訳, 82頁をも参照。

**AL 65**／九五 「有機体性」 son organicité

本書を通じて繰り返し論じられる有機体と断片の関係について, ナンシー『無為の共同体』邦訳, 145頁をも参照。

**AL 69**／一〇三 「最も深き内奥」 cette « intimité la plus profonde »

『近代人の模倣』邦訳, 88-90頁, および『メタフラシス』邦訳, 56頁にあたる箇所ではヘルダーリンの表現が l'intériorité la plus profonde と訳されている。また「いかなる心理 - 社会学的な内面性よりも内的な内部 un intérieur plus intérieur que toute intériorité psycho-sociologique」(AL 388／六一〇) や AL 192／三一三の記述をも参照。(25) 頁の訳注28に記したヘルダーリンについて, *Œuvres*, coll. « Pléiade », p. 657 では l'intériorité la plus profonde。Friedrich Hölderlin, *Fragments de poésie*, édition bilingue de Jean-François Courtine, Imprimerie nationale, 2006, p. 245 では l'intimité la plus profonde。

**AL 76**／一一三 「辛辣」 piquant

L. 67, 88, 97, Ath. 171, 421参照。「奇異 insolite」は Ath. 383および429で「珍しい／奇妙さ seltsam(keit)」の訳語として用いられている。

AL 78 / 一一七 「観ること」 *vue*

Ath. 432末尾の *Sehen* の訳語は *la vision* であり、文脈上これを指すが、「見解 *Ansicht*」の訳語でもある (AL 186, 187 / 三〇三, 三〇五)。

断章

L. 59 「賢者は運命に対して……」

(31) 頁の訳注3を補足すると、「賢者 *sage*」と「紳士 *honnête homme*」はシャンフォール自身が近いものとして言及している (例えば *Maximes...*, « *Folio* », p. 60 et 76 ; 邦訳, 432頁)。しかしエローによれば、この変化はシャンフォールの思想をそれ自身では到達しえなかったであろう地点へ導く (cf. *Ayrault*, III, p. 117)。当時、社交生活が存在せず、「隣人 *prochain* の観念がルター派の記憶にまみれていた」ドイツにおいて、シャンフォールにとって「隣人」とは「ありうる敵対者 *adversaire possible*」であり、この者によって、機知の交換という「血の流れないこの種の決闘」(« *Folio* », p. 82 ; 邦訳, 434頁) で組み伏せられてはならないということ、いかにして理解してもらえば良いのか? エロー曰く、「運命 *destin*」への示唆はこれに代わるものであり、シャンフォールに「余計に付け加えられた」ものではあるが、「彼はおそらくこれを拒否しはしなかったことだろう」。シャンフォールは「賢者」を「幸運=財産を愛する者 *l'ami de la fortune*」(« *Folio* », p. 92) に好んで対置したのであった (*fortune* については « *Folio* », p. 92 ; 邦訳, 416頁をも参照)。

L. 126 「鼻」 *Nase / le nez*

1797年2月末のノヴァーリス宛書簡に、シュレーゲルが機知の一般理論に関連して、鼻について何かを書くつもりである旨、記されている。Vgl. *KFSA*, Bd. 23, S. 348 ; Bd. 16, S. 152.

Ath. 8 「ステネロス」 *Sthenelos / Sthénélos*

カパネウスの子。ホメロス『イリアス』第2巻, 564行, および第4巻, 403行以下。

Ath. 21 『十二夜』

フランス語訳では『公現祭の夜』*La Nuit des rois*。第2幕第3場 (岩波文庫, 50頁) 以降参照。

Ath. 34 「左手結婚」 *Ehen an der linken Hand / des mariages de la main gauche*

「貴賤結婚 *Morganatische Ehe*」とも呼ばれ、ドイツではしばらくその名残がみられたローマの婚姻制度に由来するという。

**Ath. 34** 「共同の人格性に統合されたたんなる一部」 nur der integrante Teil einer gemeinschaftlichen Personalität / seulement partie intégrante d'une personnalité collective

ル・ブランによる仏訳注はノヴァーリス「断章あるいは思考課題」199を参照する。「人間はみな、ひとつの完全なる個、すなわち一組の夫婦 [Ehe] の、さまざまな変奏である」。Schlegel, *Fragments*, trad. Charles Le Blanc, p. 272 ; vgl. *HKA*, Bd. 2, S. 564. 『ノヴァーリス作品集1』, 268頁。

**Ath. 51** 「純然たる本能」 bloß Instinkt / pur instinct

ル・ブランは *Literary Notebooks 1797-1801* を参照。

「純然たる本能にすぎない素朴はばかげている。純然たる故意の場合には気取っている。美しい素朴はその両方でなければならない。」 (424. Das Naive was bloß Instinct ist, ist albern ; was bloß Absicht, affectirt. Das schöne Naive muß beides zugleich sein. [= *KFSA*, Bd. 16, S. 120, Fr. 426])

および以下の断章をも参照。„976. Der coordinirte Begriff zu *Naiv* ist wohl eigentlich *correct* ; d. h. bis zur Ironie gebildet, wie *Naiv* bis zur Ironie natürlich. -- Steht nicht die *correcte* π[oesie] in d[er] Mitte zwisch[en] der *classisch[en]* und der *progressiven* ?/“ [= *KFSA*, Bd. 16, S. 167, Fr. 985]

**Ath. 59** 「ディオニュシオス」 Dionysius / Denys, 「石切場」 Latomien / Latomies

Latomia del Paradiso : イタリア南部, シチリア島, シチリア自治州の都市シラクサにある古代ギリシア時代の石切り場跡。ネアポリ考古学公園内にある。17世紀末の地震で採石場跡の天井が崩れ, 岩の天蓋が偶然できたことから名づけられた。ディオニュシオスの耳と呼ばれる, 高さ20メートル, 奥行65メートルの耳の形をした洞窟がある。後出, **AL** 298への注記をも参照。

**Ath. 73** 「人口」 die Bevölkerung / la population

ノヴァーリスは断章のタイトルの一つとして「人口と真理。 類似」を考えていた。Vgl. *HKA*, Bd. 2, S. 629.

**Ath. 82** 「シャンフォールが世間一般の友人について語ったこと」 was Chamfort von den Freunden sagte... / ce que Chamfort dit des amis...

示唆されるシャンフォールの箴言は以下。「世の中には三種の友がいる, と…氏は言った。諸君を愛する友, 諸君を気にかけてない友, 諸君を憎む友, だと」。« Dans le monde, disait M..., vous avez trois sortes d'amis : vos amis qui vous aiment ; vos amis qui ne se soucient pas de vous, et vos amis qui vous haïssent. » Cf. Chamfort, *Œuvres*, 1794, t. 4, p. 401 ; 1796 (éd Ginguéné), p. 258 ; *Maximes et pensées. Caractères et anecdotes*, coll. « Folio », p. 280, fr. 1011.

**Ath. 84** 「つねに核心で始まる」 fängt die Philosophie doch immer in der Mitte an / la philosophie commence toujours en plein milieu

ホラティウスはホメロスの技法を評して、彼は読者をいきなり「出来事の核心へ in medias res」導く、と述べる。「詩論」第148行:『書簡詩』高橋宏幸訳、講談社学術文庫、2017年、158頁。

**Ath. 93** 「精神と文字についての学説」 Die Lehre vom Geist und Buchstaben / la doctrine de l'Esprit et de la Lettre

山本定祐による訳注(『シュレーゲル兄弟』)で以下の断片が示唆されている。「文字は固定された精神である。読むということは、縛られた精神を解放することである。それゆえ魔術的な行為である」(KFSÄ, Bd. 18, S. 297, Fr. 1229)。「精神(霊)」と「文字」の対比については新約聖書「コリント人への第二の手紙」3:6。

ル・ブランの訳注はヨーゼフ・ケルナー(1888-1950)の編集による断片を参照している。「より一層、はるかに、歴史主義に拘らねばならず、これは文献学に不可欠なものである。文字に抗して、精神に[拘らねばならない]。[……]文献学者自身が哲学者でなければならない。"Weit mehr muß insistirt werden auf den Historismus, der zur Philol.[ogie] nothwendig. Auf Geist, gegen den Buchstaben. [...] Der Philolog selbst muß Philosoph seyn."

Vgl. Josef Körner „Friedrich Schlegels „Philosophie der Philologie““, *Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, Bd. XVII, 1928, S. 17 = KFSÄ, Bd. 16, S. 35, Fr. 8.

**Ath. 122** 「芸術学文庫」 [die] Bibliothek der schönen Wissenschaften

『カント全集』岩波書店、第2巻、559頁参照。1758年にメンデルスゾーンが崇高に関する論考を寄稿、次いで、バークの所論を紹介したという。

**Ath. 146, 166** 「スエトニウス」

Gaius Suetonius Tranquillus. 70頃-122年以後。ローマの伝記作家。**Ath. 326**をも参照。

**Ath. 150** 『アグリコーラ』

ローマ元老院議員アグリコーラ(Gnaeus Julius Agricola, 40頃-93), 女婿タキトゥスによる伝記として、『アグリコーラ』(國原吉之助訳、ちくま学芸文庫、1996年)参照。64年に「財務官 quaestor」、66年、護民官、68年、法務官、77年にコンスル。ブリタンニア総督(78-85年)。

**Ath. 158** 「マルティアリス」, 「カトゥルス」

Marcus Valerius Martialis. 40頃-104年頃、ローマのエピグラム詩人。Gaius Valerius Catullus. 84頃-前54年頃、ローマの抒情詩人。

**Ath. 159** 「アウソニウス」

Decimus Magnus Ausonius. 310頃-394年頃。ローマ帝政末期の詩人、キリスト教徒の世俗文学の始祖。風光明媚なモーゼル川をたたえるヘクサメトロス（6脚韻）483行の紀行詩『モセッラ』（*Mosella*, 371年頃）は代表作として挙げられる。

**Ath. 169** 「ハーシェル」

Sir William Frederic Herschel, 1738-1822. ドイツ・ハノーヴァー生まれのイギリスの天文学者。1774年、大口径の反射望遠鏡を自作、天体観測に着手。

**Ath. 183** 「 Hogarth」

William Hogarth, 1697-1764. イギリスの画家、版画家、著作者。

**Ath. 193** 「プロペルティウス」

Sextus Propertius. 前50頃-前16頃。ローマ共和政期の代表的恋愛詩人。エレゲイア詩型による詩集4巻を残す。

**Ath. 197** 「ヒュベルボレオス人」

ヒュベルボレオイ (Hyperboreoi), ギリシア神話で「ボレアス（北風）の彼方に住む者」の意の伝説的種族。世界の北の果てで平和で幸福な生活を営むと想像されていた。アポロンの熱心な崇拝者で、アポロンは毎冬を彼らと共に過ごすと言われた。

**Ath. 210** 「ルジェ・ド・リール」

Claude Joseph Rouget de Lisle, 1760-1836. フランスの軍人、音楽家。工兵将校として革命戦争の初期にライン方面軍に属し、宣戦（1792年）の直後、ストラスブール市長ディートリヒのサロンで自ら作詞・作曲した「ライン方面軍の軍歌 *Chant de la guerre pour l'Armée du Rhin*」を披露。のちにフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」となった。

「サムソン」

ヘブライ：šimšôn, 英：Samson。イスラエルの十二士師中最後の一人。怪力によって宿敵ペリシテ人を圧倒したが、敵に罾られた女デリラ (delilah) にナジル人である自身の力の秘密がその長髪に一度もかみそりを当てたことがないことによる（「民数記」6：5）と打ち明け、眠っている間に髪を切られ、力を失った（「士師記」13-16）。

**Ath. 220** 「期待が無の中へ解消……」 *die sich in Nichts auflösende Erwartung / cette attente se*



dissolvant en néant

カント『判断力批判』A 222 / B 225参照。「笑いは、張り詰めた期待が突然無に転化することから生ずる情動〔ein Affekt〕である」(宇都宮訳, 上巻, 389頁)。

**Ath. 222** 「ばねとなる点」der elastische Punkt / le point élastique

Vgl. *KFSA*, Bd. 18, S. 519, Fr. 19. 「不確かな知識欲〔Wissenstrieb〕——自分自身に向かう——はまた、知識学の基礎にしてばねとなる点〔der Grund und elastische Punkt〕である。」

**Ath. 252** 「自我は自我であるという命題」...aus dem Satz folgt, daß Ich = Ich sei / la proposition selon laquelle Moi = Moi

『フィヒテ全集』哲書房, 第4巻, 57頁, および90頁以下参照。

**Ath. 259** 「レッシングの塩」ein Lessingsches Salz / un sel de Lessing

1751年11月の月報「機知の国便り」(„Das Neueste aus dem Reiche des Witzes“)に掲載された「宗教」(Die Religion) という記事内の Erster Gesang に以下のようにある。Vgl. Gotthold Ephraim Lessing, *Werke 1751-1753*, Deutscher Klassiker Verlag, „Bibliothek deutscher Klassiker“, Bd. 149, 1998, S. 273. 試訳に際しては加藤健司氏の教示を得た。

Die Ruhmsucht – hab ich sie nicht oft mit spöttischer Miene,

Die lächelnde Vernunft auf mir zu bilden schiene,

Mit Gründen, frisch durch Salz, für Raserei erklärt,

Und unter andrer Tracht sie in mir selbst ernährt?

名誉欲, 私はそれを嘲笑の顔では迎えなかった,

その表情は, ほくそ笑む理性が私に生み出していたようだ,

もっともらしく, 塩味を効かせて, 狂気の沙汰と宣告する

さらに装いを替えて, 私の内に自らを養うか。

ラテン語で「塩 sal」は冗談や機知をも意味するため, 3行目の意味するところは「才気煥発な機知によって説得的に」といった具合であろう。またシュレーゲルは「レッシングについて」で以下の言を引く(*KFSA*, Bd. 2, S. 110)。「少しばかり辛辣にすぎる言い方をしなければならぬとすれば——塩味を効かせてはならないのだとすれば, 塩が何の役に立つだろうか」

(Vgl. Lessing, *Werke 1774-1778*, „Bibliothek deutscher Klassiker“, Bd. 45, 1989, S. 540)。この一節を含む『再答弁』(*Eine Duplik*)をとりまく「断片論争」については以下を参照。安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究』創文社, 1998年, とくに40, 126頁。

同論考には「力と精神と塩に満ちた僅かな堅牢な言葉で……」ともある (KFS4, Bd. 2, S. 112)。酒田健一『フリードリヒ・シュレーゲルの「生の哲学」の諸相』, 119頁参照。

「フェルメンタ・コグニチオニス／認識の酵母」fermenta cognitionis

レッシング『ハンブルク演劇論』第95節にみられる表現 (南大路振一訳, 鳥影社, 2003年, 454頁および581頁参照)。訳者によれば, 元は3世紀のローマの著作家ソリヌス (Gaius Julius Solinus) によるものだという。

**Ath. 261** toll aber klug / fou, mais avisé

ゲーテ「ヴィラ・ベラのクラウディーネ」大山定一訳, 『ゲーテ全集』改造社, 第12巻, 1937年, 501頁: 「氣がちがつてゐるかもしれぬ, しかし賢明に考へてはあるのだ」。

『クラウディーネ——戯曲と歌劇』渡辺格司訳, 明窓書房, 1948年, 199頁: 「不向見でも先は見てるさ」。

**Ath. 287** 「私とその作家の精神に則って行動できる」ich in seinem Geiste handeln kann / je puis œuvrer dans son esprit

訳文中だが動詞 *œuvrer* が用いられている箇所。AL 371/五八二, (24) 頁の訳注24, (62) 頁の訳注38をも参照。

**Ath. 295** 注「ヒュルゼン」

Ayrault, *Genèse*, III, p. 45 sq. では, フリードリヒやノヴァーリスがシェリングと比較してヒュルゼンを一時期高く評価した点が, 当時の書簡を追いながら確認される。

IV, p. 240 sq. はフィヒテ哲学を承けたヒュルゼンの政治思想を概観する。ディーチュ『超越論哲学の次元 1780-1810』, 89頁以下をも参照。

**Ath. 298** 「皇帝の言葉は……」Ein Kaiserwort soll... / ... de la parole impériale

ビュルガーのバラード「ヴァインスベルクの女性たち」(Die Weiber von Weinsberg) の一節。

**Ath. 304** 「自然学の哲学」[die] Philosophie der Physik / la philosophie de la physique

Naturphilosophie と同義か。シェリング「自然哲学に関する考案」(1797年) 序文末尾に以下のようにある。「私の目的はむしろ自然学そのもの〔die Naturwissenschaft selbst〕をいまはじめて哲学的に成立させるということにある。私の哲学はそれ自体が自然学〔Naturwissenschaft〕にはかならないのである。われわれは化学によって字母〔die Elemente〕を, 自然学〔Physik〕によって綴り方〔die Sylben〕を, 数学によって自然の読み方を学ぶ」(『シェリング著作集』

燈影舎, 第1b巻, 2009年; 第2版, 2011年, 9頁)。

**Ath. 310** 「静謐なる偉大と高貴なる単純」 *stille Größe und edle Einfalt / la calme grandeur et la noble simplicité*

ヴィンケルマン『希臘芸術模倣論』澤柳大五郎訳, 座右寶刊行會, 1943年, 32頁; 改版, 1976年, 36頁; 『ギリシア芸術模倣論』田邊玲子訳, 岩波文庫, 2022年, 50頁。AL 314/四九七にも「静謐な偉大 *stille[r] Größe / une grandeur silencieuse*」とある。

**Ath. 311** 「イギリス人の銅版画の手仕事による優美さ」 *die mechanische Zierlichkeit ihrer Kupferstiche / la mièvrerie mécanique de leurs eaux-fortes*

「すべては最小限のもので成し遂げられている。彼〔フラックスマン〕のスケッチ〔Umriss〕は、最初の着想の意味深い大胆さを最も完璧な手法による細心さおよび優美さ〔Zierlichkeit〕と調和させている」(A・W・シュレーゲル「詩の挿絵とジョン・フラックスマンのスケッチについて」, 『ゲーテ美術論集成』高木昌史編訳, 青土社, 2004年, 259頁)。Cf. August Schlegel, *Les tableaux suivi Des illustrations de poèmes et des silhouettes de John Flaxman*, Christian Bourgois, 1988, p. 158.

**Ath. 313** 「ティマレテ (ティマレテー)」、 「イレネ (エイレーネー)」、 「イアイア」

『博物誌』第35巻, XL, 147; 『プリニウスの博物誌』中野定雄ほか訳, 雄山閣出版, 第3巻, 1986年, 1473頁。

**Ath. 316** 「憲法」 *die Konstitution / la Constitution*

ル・ブランは *complexion* (体質) の意味にもかけている, と注釈。

**Ath. 318** 「博識によっては理性を身につけられない」 *man lerne die Vernunft nicht durch Vielwisserei/ la raison ne s'apprend pas en accumulant des connaissances*

ヘラクレイトス「博識は分別を教えない」(*πολυμαθίη νόον ἔχειν οὐ διδάσκει / „Vielwisserei lehrt nicht, Verstand zu haben“ ; vgl. DK, B, 40*)。『初期ギリシア自然哲学者断片集』日下部吉信編訳, ちくま学芸文庫, 第1巻, 2000年, 311頁; ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』IX, I, 岩波文庫, 下巻, 91頁。

**Ath. 319** 「プラトンが特性描写する, 本当の吟遊詩人<sup>ラフソード</sup>と同じように」 *gleich echten Rhapsoden nach Platos Charakteristik dieser Gattung / pareils aux vrais rhapsodes selon la caractéristique de cette espèce par Platon*

プラトン『イオン』535a 以下参照（『プラトン全集』岩波書店，第10巻，1975年，132頁以下）。本書刊行後ほどなくして，ナンシーは詩人と神がかりについて『声の分割』（1982年）で論じることになる（邦訳，62頁以下）。またル・ブランは Ath. 21, 41, 47, 104, 298, 322を参照し，当時の哲学注釈者やカントの弟子たちへの揶揄をみる。

**Ath. 323** 「預言者は故郷に容れられぬ」 ein Prophet nicht in seinem Vaterlande gilt ist / nul n'est prophète en son pays

「マルコによる福音書」6：4，「マタイによる福音書」13：57，「ルカによる福音書」4：24参照。

**Ath. 324** 「すべてのジャンルはよい……」

1736年初演のヴォルテールの喜劇「放蕩児」*L'enfant prodigue*の序文末尾にみられる言葉。

« Encore une fois, tous les genres sont bons, hors le genre ennuyeux. »

**Ath. 325** 「シモニデス」Simonides / Simonide

前556-前468頃，古代ギリシアの抒情詩人。プルタルコス「アテナイ人の名声は戦争によるか知恵によるか」，『モラリア』京都大学学術出版会，第4巻，2018年，353頁参照。

ホラティウス『試論』361行，「詩は絵のように（ut pictura poesis）」として常套句（トボス）となる。『書簡詩』，前掲邦訳，178頁；『ホラティウス全集』鈴木一郎訳，玉川大学出版部，677頁。同様のトボスがアリストテレス『詩学』（1447a19）や，キケロー『トゥスクルム荘対談集』第5巻39にみえる（『キケロー選集』岩波書店，第12巻，348頁）。

この伝統に異を唱え，絵画とポエジーを峻別しようとするレッシングは，『ラオコーン』序文でシモニデスのフレーズに言及している（斎藤栄治訳，岩波文庫，11頁）。

「記述詩」（または「叙景詩」，「情景描写詩」とも）descriptive poetry

トムソン（James Thomson, 1700-1748）の『四季』（*The Seasons, A Poem*）は18世紀前半の同ジャンルを代表する。

**Ath. 326** 「カエサルは，戦鬪の混乱のなかで……」

スエトニウス『ローマ皇帝伝』，第1巻，62（国原吉之助訳，岩波文庫，1986年，上巻，67頁）参照。スエトニウスについては Ath. 146, 166, 394をも参照。

**Ath. 333** 「何ものもその可能性を妨げないがゆえに……」 weil nichts seine Möglichkeit verhindert / rien n'interdit sa possibilité

『モナドロジー』, 第45節参照 (谷川多佳子・岡部英男訳, 岩波文庫, 42頁)。

**Ath. 336** (244頁) 「見た目からその内なるものを構成する術を……」 müßt verstehn aus den Erscheinungen das Innere [...] zu konstruieren

仏訳は *savoir construire l'intérieur à partir des manifestations* と、*Erscheinung(en)* を (例えば *phénomène* ではなく) *manifestation(s)* で訳す (**Ath.** 331, 428 (ただし *Äußerung(en)* の訳語にもなっている), **Id.** 26でも同様; 対して, **Ath.** 120の *manifestations* の原語は *Äußerungen*)。「断片の要求」の訳注23および **AL** 44, 68, 76/六一, 一〇〇, 一一三を参照。その他の用例として, **AL** 287, 343, 345, 349, 355, 384, 394, 398, 401, 405, 421-422/四五六, 五四一, 五四四, 五五〇, 五五八, 六〇二, 六一八, 六二四, 六二八, 六三四 (「姿」), 六五七-六五八。

**Ath. 346** 「哲学者たちのあの宙返り」*Der gepriesne Salto mortale der Philosophen / Le salto mortale tant vanté des philosophes*

ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』田中光訳, 知泉書館, 2018年, 76, 85頁; 安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究』創文社, 1998年, 280, 283頁。

「ドン・キホーテの木馬に乗った空中飛行」*Don Quixotes Luftreise auf dem hölzernen Pferde / Don Quichotte voyageant dans les airs sur un cheval de bois*

セルバンテス『ドン・キホーテ』後篇, 第41章 (牛島信明訳, 岩波文庫, 後篇 (二), 2001年, 276頁)。

**Ath. 357** 「暗示や示唆や予行演習」*Anspielungen, Fingerzeige, Vorübungen / des allusions, des indications, des préparations*

レッシング『人類の教育』§43以下。以下の各書に収録。『世界文学全集』講談社, 第17巻, 1976年 (有川貫太郎訳); 『理性とキリスト教——レッシング哲学・神学論文集』谷口郁夫訳, 新地書房, 1987年; 『レッシング『人類の教育』』安酸訳, 『聖学院大学論叢』第9巻第1号, 1996年 (『レッシングとドイツ啓蒙』, 前掲書に所収)。

**Ath. 358** 「それは感情まで到達することもある」*Cela peut aller jusqu'au sentiment*

ライプニッツ「理性に基づく自然と恩寵の原理」第4節 (『モナドロジー』, 前掲邦訳, 80頁)。

**Ath. 363** 「ラウラ」*Laura / Laure*

ペトラルカの叙情詩集『カンツォニエーレ』の主人公。ペトラルカが「ある年の聖金曜日」(1327年4月6日), アヴィニョンの聖クレール (クララ) 聖堂で初めて目にして, 決定的な

愛に捕らえられたという。

**Ath. 369** 「代表者」 Repräsentant / représentant

ノヴァーリス「政治的統率者〔Anführer〕は〔……〕人間性の守護霊の代理人〔der Repräsentant〕と混同されてきた。〔……〕人間性の守護霊の完全な代理人〔ein vollkommener Repräsentant〕は、真の司祭であり、本来の詩人〔der Dichter κατ'εξοχην〕だと言ってよいであろう」（『花粉』76：『ノヴァーリス作品集 I』, 128頁）。

**Ath. 379** 「イタリアやイギリスの詩人たちの悪魔は……」 Der Satan der italiänischen und engländischen Dichter... / le Satan des poètes italiens et anglais...

ル・ブランはクリストファー・マーローの『フォースタス博士』（*The Tragical History of Dr. Faustus*）を示唆。

「悪魔性 Satanität」が「ドイツ的な発明 eine deutsche Erfindung」であり、「グロテスク美学の概念 ein Begriff d[er] grotesken Aesthetik」であることが遺稿断片にみられる。Vgl. *KFSA*, Bd. 18, S. 116, Fr. 1052.

**Ath. 384** 「古代の<sup>ポエジー</sup>文学」〔der〕 alten Poesie / la poésie antique

ル・ブランによればオウィディウス『変身譚』。

**Ath. 390** 「経済家」 die Ökonomen / les économes

ル・ブランは regisseur と訳し, Landwirt (exploitant agricole), 土地, 開拓地, 家畜の管理人, 差配人の意味だという。

**Ath. 391** 「自分自身を文学によって触発すること」 sich selbst literarisch affizieren / s'affecter soi-même littérairement

ナンシー晩年の時評集に、「汝自身を触発せよ Affecte-toi toi-même」という格言風の形で引用される。Cf. Jean-Luc Nancy, *Un trop humain virus*, Fayard, 2020, p. 81.

**Ath. 394** 「カエサルが真珠や宝石を……」 Caesar die Perlen und Edelsteine in der Hand... / César soupesait avec soin...

スエトニウス『ローマ皇帝伝』第1巻, 47参照（前掲邦訳, 54頁）。F・シュレーゲル「カエサルとアレクサンドロス：世界史的比較」（1796年）に同様の記述がある（*KFSA*, Bd. 7, S. 42）。

**Ath. 418** 『修道僧』 Klosterbruder / Moine

『芸術を愛する一修道僧の心情の披瀝』江川英一訳, 岩波文庫, 1934年。

**Ath. 435** 「異国人はすべて敵である」 jeder Fremde ein Feind sei / tout étranger est un ennemi

ル・ブランはスパルタを示唆するが不詳。レーヴィ『これが人間か』(邦訳『アウシュヴィッツは終わらない』)冒頭でトポスとして引用。ラテン語では Hospes, hostis, として格言化している。

キケロー「義務について」第1巻, 12 (『キケロー選集』第9巻, 150頁)に hostis という語の意味をめぐる記述があり, 敵と外国人の同一視というトポスは少なくともこのあたりまで辿ることができる。語の歴史的説明については, バンヴェニスト『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集 I — 経済・親族・社会』, 1986年, 80頁以下。

**Ath. 439** 「検死報告書」 visum repertum

本来は visum et repertum で「見られたものと発見されたもの」の意。ル・ブランによれば「法医学者が死体に生じた変質について作成する記述。文字通りには, 視覚的目録」。AL は visum を名詞, repertum を形容詞と解したか (« Perspective découverte »)。16世紀にこうした報告書の作成やその技法が体系化され始める。Cf. Diego Carnevale, “*Visum et Repertum*: Medical Doctrine and Criminal Procedures in France and Naples (17th–18th Centuries)”, in Francesco Paolo de Ceglia (ed.), *The Body of Evidence: Corpses and Proofs in Early Modern European Medicine*, Brill, 2020.

また吸血鬼伝説の一端として知られるオーストリア傭兵アルノルト・パウエル (Arnold Paole) の死因調査を行った軍医ヨハン・フリュッキンガーによって『見聞録』(Johann Flückinger, *Visum et Repertum*, 1732) が作成・出版され, ヨーロッパ諸国で読まれたことが知られている。

## 芸術の限界内における宗教

**AL 181** / 二九六 「断片化が……最後には解体し, 「無為にする = 脱作品化する」 la fragmentation [...] finisse donc par disloquer et « désœuvrer »

遺稿断片の一つに, 「『ルツィンデ』は徹頭徹尾未完成 [unvollendet]; 作品の自己破壊的なもの [das Selbstzerstörende]」とある (KFSÄ, Bd. 16, S. 244, Fr. 143)。AL 275 / 四三六をも参照。この断片には J.-J. アンステットが『ルツィンデ』の仏訳序文の末尾で (KFSÄ とは別の文献に依拠して) 言及している。

**AL 182** / 二九七 「ゲーテの影……趣味と嗜み……」 l'ombre de Goethe – Weimar, l'establishment

littéraire, l'autorité en matière de goût et de bienséance...

「嗜み」と訳した *bienséance* は礼節・礼儀を指すが、古くは法則・流儀・好みとの「適合・合致」、「似つかわしさ」を意味しており、「真実らしさ *vraisemblance*」と合わせて古典主義理論の中心核をなした。AL 383/六〇〇、および以下を参照。

南大路振一「ゲーテとヴォルテール——一つの点描」、『モルフォロギア——ゲーテと自然科学』2003年、第25号、7頁。エッカーマン『ゲーテとの対話』山下肇訳、岩波文庫、中巻、1968年、50頁（「礼儀作法の限界内に *in den Grenzen des Schicklichen*」, 「慣習の限界 *die Linie der Konvenienz*」）。また『百科全書』の記述について以下。小澤京子『ユートピア都市の書法』, 博士論文、68頁（=同『都市の解剖学』ありな書房、2011年、115頁に対応するが加筆された部分。同書、212頁注29、213頁注38をも参照）。

ただし例えば『親和力』の仏訳で「慣習の命ずる限界 *les bornes de la plus sévère bienséance*」が充てられている箇所原語は *den strengsten Grenzen der Sittlichkeit*。Cf. Goethe, *Les affinités électives*, trad. Aloïse de Carlowitz, Charpentier, 1844, p. 192. 『親和力』柴田翔訳、講談社文芸文庫、1997、256頁。

その他、ラ・ロシュフコー『箴言集』447:「ふさわしさは、あらゆる掟の中で最もやさやかな、そして最もよく守られている掟である *La bienséance est la moindre de toutes les lois, et la plus suivie*」。二宮フサ訳、岩波文庫、1989年、127頁。

ラ・ブリュイエール訳によるテオフラストス曰く、「粗野とは無作法きわまる無知と見られるだろう *Il semble que la rusticité n'est autre chose qu'ignorance grossière des bienséances*」。同様に、「いやがらせとは、露骨で、無作法きわまる悪ふざけである...*ce qu'il y a de plus honteux et de plus contraire à la bienséance*」。

Cf. *Les caractères de Théophraste*, traduits du grec, avec *Les caractères ou les mœurs de ce siècle*, [par J. de La Bruyère], 1688, p. 69 et 96. テオフラストス『人さまざま』森進一訳、岩波文庫、1982年、24、51頁。ラ・ブリュイエールについては、『キャラクター』関根秀雄訳、岩波文庫、下巻、1953年、212頁（「禮儀」）をも参照。

AL 183/二九八-二九九 「活用および搾取」 *exploitation*

例えば AL 349/五五〇 (A. Schlegel, *Kritische Ausgabe der Vorlesungen* [= *KAV*], Bd. I, S. 388) の「ポエジーのポエジー」という言い方は Ath. 238にみられる。また「文学ジャンルについて」(Von den Dichtarten) と第されたセクションでは、Ath. 116を想起させる「限界を知らぬ発展性 *Gränzenlose Progressivität*」などの表現が用いられている (*KAV*, Bd. I, S. 462)。他方、グザヴィエ・ティリエットはシェリングによる「渾沌」のモチーフの横領について指摘している。Xavier Tilliette, *Schelling. Une philosophie en devenir*, Vrin, 1970, tome 1, p. 430 sq.

ティリエットは別の伝記でも、『超越論的観念論の体系』の一節（『著作集』文屋秋栄、第2



巻, 365頁; AL 342/五三九) を, ほとんどつぎはぎによる剽窃 (centon) として引いている。  
Tillette, *Schelling. Biographie*, CNRS Éditions, 2010, p. 85.

**AL 187/三〇五** 注 「生まれつき備えている哲学そのもの」 la philosophie naturelle elle-même  
ドイツ語原語は die natürliche Philosophie selbst。L. 82, 108, AL 241/三九一の  
Naturphilosophie にも philosophie naturelle が充てられている。

**AL 189/三〇八** 「巧みな差し向け」 adresse

(37) 頁の訳注18に付記すると, ラクー=ラバルトは本書以後, Geschick の訳語としてフランソワーズ・ダステュールが adresse を提案したことを喚起している。当のドイツ語は英語の skill に相当する「能力, 技量; 器用, 巧みさ」と同時に, 「運命, 命運」を意味する。『メタフラス』邦訳, 21, 104, 115-116頁参照。

**AL 190/三〇九** 「範例性」 exemplarité

この章でしばしば言及される「範例 exemple」の文学上の機能・位置づけについて例えば以下。  
永盛克也「〈書評〉 Béatrice Guion, *Du bon usage de l'histoire. Histoire, morale et politique à l'âge classique* [...]」, 『仏文研究』43, 2012年; 上杉誠「スタンダールのカノーヴァ: 「伝記の世紀」と芸術家像」, 『藝文研究』121, 2021年。哲学上の問題として小田部胤久『美学』東京大学出版会, 2020年, 328頁以下。

**AL 194/三一四** 「融合する」 fusionner

Ath. 451, Id. 108等も参照。

**AL 194/三一七** 「絶対的な範例……範例性と形象化のまさしく限界にある範例および形象」  
exemple absolu [...] exemple et figure à la limite même de l'exemplarité et de la figuration

AL 52, 270/七五 (ただし, そこで「形象化」と訳したのは figurabilité), 四二八など, また (36) 頁の訳注16に加えて以下をも参照。『メタフラス』邦訳, 58, 84, 87頁 (「強い意味における」 「模範 modèles あるいは範型 exemples」)。

**AL 199/三二五** 「先にみた哲学とポエジーの結合」 cette union de la philosophie et de la poésie

前の頁で引かれる Id. 46の「つなげる verbinden」の訳語は relier だが, Ath. 451の Verbindung の訳語は l'union。AL 69, 272/一〇二, 四三〇をも参照 (後者での l'union の訳語は「統一」)。

着想集

**Id. 34** 「宗教を持っているひとは、文学を語るだろう」 Wer Religion hat, wird Poesie reden / Qui a de la religion parlera en poète

仏訳は「詩人となって語るだろう」と訳すことができるが、ハイデガーの『講演・論文集』収録の「人は詩人として住まう」 („... dichterisch wohnt der Mensch...“) の仏訳 « ... L'homme habite en poète... » を連想させる。

**Id. 44** 「人間のなかにいる人間……生きることができる」 der Mensch unter Menschen... / l'homme parmi les hommes...

ル・ブランは「シュレーゲルはここで詩人のことを考えている」と注記。

「媒介することと媒介者になること」 Vermitteln und Vermitteltwerden

仏訳では « Médiatiser, être médiatisé », ル・ブラン訳では « Communiquer et être communiqué » と後者を受け身に解する。

**Id. 98** 「無限なものなかで形成されている有限なものを思い描いてみよ」 Denke dir ein Endliches ins Unendliche gebildet

仏訳では「無限なもの形態のなかで Imagine-toi le fini dans la forme de l'infini」。

**Id. 115** 「大規模に働きかけ〔る〕」 ins Große wirken / agir en grand

ル・ブランは wirken に関して、「影響を及ぼす」 avoir de l'influence の意もあると注記（フランス語で agir のみだと「行動する、振る舞う」の意がまずは念頭に置かれるためか）。

またこの表現は「体系プログラム」でも「総体としての自然学」 die Physik im Großen / la physique en grand という箇所 で用いられている。

**Id. 119** 「彼らは神的なことを行っている」 Sie wirken Göttliches / Ils font œuvre divine  
wirken と œuvre の関連については (12) 頁の訳注39, および (20) 頁の訳注30参照。

**Id. 147** 「本当に自由な人間が構築し……」 der freie Mensch schlechthin konstituiert...

仏訳では「本当に構築する」に l'homme libre constitue absolument が充てられている。

## ハインツ・ヴィダーポルストの信仰告白

### AL 248/四〇一 「無宗教」 irreligion

ノヴァーリスの用例として『花粉』74を参照（『作品集1』, 126頁）。

### AL 249/四〇二 「哲学的作品」 *opus philosophicum*

以下の箇所にみられる「形而上学的作品 *opus metaphysicum*」という表現を参照。『近代人の模倣』邦訳, 80頁；『メタフラスシ』邦訳, 51頁, およびニーチェ『反時代的考察』ちくま学芸文庫, 413頁。

### AL 251/四〇四 下段

「断片 Fragment」はノヴァーリス「キリスト教, あるいはヨーロッパ」を, 「講話 Rede」はシュライアマハー『宗教についての講話』を示唆する。Cf. Schelling, *Introduction à l'esquisse d'un système de philosophie de la nature*, Livre de poche, p. 171.

### AL 252/四〇五 上段 「昔のサウル」 der alte Saul / le vieux Paul

前掲 Schelling, *Introduction à l'esquisse...*の訳注が言うように, 聖書的な「換名 *métonomasié*」の例。「創世記」17: 5参照。サウロは回心時に目が見えず, 飲食もできなくなるが（「使徒行伝」9: 9）, ヴィダーポルストの「回心」はこれを逆向きに模倣しており, 「ワインも酒も」摂ることができ, 周りも「両目ではっきりと見えた」。

### AL 255/四〇九 上段 「どうしてぼくが世界を……」

(43) 頁の訳注5に記したとおり, 第184-249行が『思弁的自然学雑誌』に匿名で発表された。

### AL 257/四一〇 - 四一一

上記『雑誌』では, 第245行「昼も夜も天を照らし,」 Den Himmel so Tag wie Nacht erhellt, の後は本書で訳出された次の4行から,

Hinauf zu des Gedankens Jugendkraft,  
Wodurch Natur verjüngt sich wieder schafft,  
Ist eine Kraft, ein Pulsschlag nur, ein Leben,  
Ein Wechselspiel von Hemmen und von Streben,

以下の2行へと改められている。

Ist Eine Kraft, Ein Wechselspiel und Weben, (一つの力だけが, 一つの交替と活動だけが存在する)

Ein Trieb und Drang nach immer höheren Leben. (つねにより高い生へ向かう欲動と衝迫が)より詳細な草稿の異同については以下をみられたい。Schelling, *Historisch-kritische Ausgabe*, Frommann-Holzboog, Reihe 2, Nachlass 6, 2018.

AL 258／四一二 - 四一三 「コツェブー」

ハイネも言及している。『ドイツ・ロマン派』邦訳, 32, 74頁。

名もなき芸術

AL 267／四二三 「退引した結果」 l'effet même du retrait

「退引 retrait」をめぐる同時期の仕事については (51) 頁の訳注33に挙げた「政治的パニック」、および『思想』同号に掲載された拙論「恐怖への誕生」を参照されたい。

AL 269／四二七 「格言的」 gnomique

ラクー = ラバルトの対談での言及をも参照。« Entretien sur Hölderlin », *Détours d'écriture*, p. 101 ; *Europe*, n° 973, p. 49. 「ヘルダーリンをめぐる対話」邦訳, 207頁。なお (11) 頁の訳注29での同文献の指示に関して、「p. 108」とあるが正しくは「p. 95」である。お詫びして訂正する。同文献の初出時および *L'Animal* 誌再掲時には「auto-fonctionnement」が「autofonctionnement」と連結符なしで表記されていた。

AL 272／四三二 「プラトンの政治的芸術論」 Platos politische Kunstlehre

ここでの引用も Ath. 252の該当箇所も、la théorie politique de Platon となっている。

AL 272／四三二 「テキストの「工房」全体」 toute la « fabrique » du texte

AL 274-5／四三五に再出する語。AL 314／四九七にある「文学の最奥の工房 die innerste Werkstätte der Poesie」が la fabrique intérieure du texte と訳されているのを承けるか。Ath. 367の「製造所 [die] Fabrikwesen」, AL 415／六四六の「隠された作業場 die verborgene Werkstätte」も les fabriques (cachées) と訳されているほか、AL 431／六七二の「本製作業 die Büchermacherey」は la fabrication des livres。

AL 275／四三六 「『ルツィンデ』の未完成」 l'inachèvement de la *Lucinde*

上記, AL 181／二九六への注記参照。

AL 276／四三九 注 (24) 「oratio soluta」

(49) 頁の訳注22に付言すると、文字どおりには「(韻律 *mètre* から) 解かれ、解放された演説」の意。Cf. Agathe Sueur, *Le Frein et l'Aiguillon. Éloquence musicale et nombre oratoire (xvi<sup>e</sup>-xviii<sup>e</sup> siècle)*, Garnier, 2014, p. 53 sq.

**AL 278**／四四一 「係争過程」 *procès*

この語と *processus* との区別は明示されていないが、違いを示すために訳語を分けてある（ただし **AL 27**／三四ではたんに「過程」）。同時代の思想家の用例として例えば以下。クリステヴァ「過程にある主体」、『ポリログ』足立和浩・西川直子ほか訳、白水社、1986年；西川直子『クリステヴァ』講談社、1999年、139頁以下参照。

**AL 280**／四四四 「象徴体系」 *une symbolique*

例えば以下。トドロフ『象徴の理論』邦訳、302, 318, 463, 475頁（「象徴学」・「象徴論」とも訳されている）。

**AL 286**／四五五 注 (46) 「化学的機序」 *le chimisme*

**AL 277**／四三八を参照。

## 文学をめぐる会話

**AL 296**／四六九 「エポードイー」

ホラティウスがアルキロコスをラテン語に生かした反抗と批判の詩集。エポードスという詩形はギリシャ・ラテン文学の抒情詩の一形式。長めの詩句にそれより短い詩句が続く2行連句で構成される。

**AL 298**／四七二 「ピロクセノス」

Philoxenos, 前435年頃-前380頃, 古代ギリシア, キュテラ島出身の詩人。メラニッピデスに学ぶ。代表作は『キュクロプス, またはガラタイア』(前388)は、他の作品同様わずかな断片しか伝存しない。ディオニュシオス1世の作った悲劇を酷評したため石切り場で働かされたという逸話については、**Ath.** 59への注記を参照。

**AL 299**／四七四 「プロペルティウス」

上記、**Ath.** 193への注記を参照。

**AL 299**／四七五 「マエケナス」

Gaius Cilnius Maecenas. 前70年頃 - 前8年。アウグストゥス時代のローマの政治家、詩人。オクタウィアヌス（アウグストゥス）によって重要な外交的任務を託されるようになり、アントニウスとの間でブルンディシウム協定（前40年）やタレントウム協定（前37年）を結ぶのに貢献。公職には就かなかったが、前36年からは、オクタウィアヌスが不在のときには、必要に応じて全権をもってローマで彼の代理を務めた。才能ある若い文人たちを引き立て、金銭上援助。その文学サークルにはウェルギリウス、ホラティウス、プロペルティウスらが含まれた。

AL 299／四七五 「カトゥルスやマルティアリス」

上記, Ath. 158への注記を参照。

AL 301／四七七 「ラウラ」

上記, Ath. 363への注記を参照。

AL 303／四八〇 『ガラテア』, 『ヌマンシア』

「ガラテア」は牧人小説, 1585年 (『セルバンテス全集』水声社, 第1巻)。戯曲「ヌマンシアの包囲」(1583年)はゲーテらの賞賛を浴びる (『戯曲集』:『セルバンテス全集』水声社, 第5巻)。

## 文学と芸術についての講義

AL 344／五四三 仏訳注 (5) Gepräge

ラクー=ラバルトが「存在類型論 onto-typo-logie」という哲学的定式を提示したとき、ハイデガーとユンガーをめぐる刻印 (Stemple, Prägung, Prägen) にまつわる問題が念頭にあった。Cf. Lacoue-Labarthe, « Typographie », *art. cit.*, p. 181. ラクー=ラバルト『近代人の模倣』邦訳, 244頁; 『メタフラシス』邦訳, 12頁; ハイデガー『道標』創文社, 495頁をも参照。

AL 344／五四三 - 五四四 「言語は、たんなる表出から……」

このくだりについて、トドロフが論じている。『象徴の理論』邦訳, 277頁。

AL 344／五四六 「私の知るかぎりただ一人の……」

同様にトドロフ, 前掲書, 232頁参照。

AL 348／五四九 「みずからの表象を自由……」 *willkürlich / à son gré*

ヘルダー『言語起源論』宮谷尚美訳, 講談社学術文庫, 82頁の記述などと比較されたい。「恣

意 Willkür」の語は第一章冒頭（同書、12頁）から用いられている。以下をも参照。互盛夫『言語起源論の系譜』講談社、2014年、特に280頁以下。

AL 351／五五二 「蠟でできた鼻」 eine wahre wächserne Nase / [du] nez de cire

元はルターの用いた表現で、聖書の字句を自分の考えに従って歪曲することを非難して言う。例えば「十戒についてのヴィッテンベルクでの説教」(“Decem Praecepta Vuittenbergensi predicata populo”, 1518) に「聖書は蠟でできた鼻を持つ、というのは格言になっている」(“et iam proverbium factum est, scripturam habere caereum nasum”) とある。ヴァイマール版著作集 (WA), 1, 507, 34-35を参照。

また「詩篇」注解 (Operationes in Psalmos, 1519-1521) に曰く、「聖書に蠟の鼻を作ることがないように」(ne (ut dicunt) sacris literis caereum nasum faciamus) しなければならない。Vgl. WA, 5, 280, 36-38 ; Martin Luther, *Études sur les psaumes*, Genève, 2001, p. 14.

1520年のドイツ語の文書でも „ein wechsern nasen“ が用いられている。Vgl. „Von dem Papstthum zu Rom wider den hochberühmten Romanisten zu Leipzig“, WA, VI, 305, 25 ; *Works of Martin Luther*, Philadelphia, A. J. Holman Company, 1915, p. 367.

フランス語圏におけるこの表現の用例については以下に詳しい。André Gendre, « Naissance des échanges polémiques à la veille des guerres civiles : Anne de Marquets et son adversaire protestant (Texte intégral, avec une introduction et des annotations) », *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. 62, n° 2, 2000, p. 354, n 124.

なお北村透谷が「聖書を濫用する勿れ」でこの表現を用いている。「蠟を以て造りたる鼻の自在に屈曲することを得るが如く、聖書を己れが測るところ、己れが希ふところに符せて解釋す……」(『透谷全集』岩波書店、第3巻、1955年、317頁)。

AL 352／五五四 「アリストテレスはこれを反駁したのだった」

『詩学』第1章 (1447b) 参照。

AL 353／五五六 「通りすがりに、芸術の自然史の……」 …einmal beyläufig die Möglichkeit einer *Naturgeschichte der Kunst*... / ...en passant, la possibilité d'une histoire naturelle de l'art

第9講 (本書未収録)。「多くの国民のうちに、それら〔ポエジー、音楽、舞踏〕がまだまだ分かちがたい絆で結ばれているのを私たちは見出します。そしてそれら3つの自然の芸術〔drey natürlichen Künsten〕のうちに、というのもそれらに関してのみ自然史〔eine Naturgeschichte〕が存在しうるのですが……」(KAV, Bd. 1, S. 272)。

AL 353／五五六 「造形芸術の最初の萌芽」 der erste Keim der bildenden Kunst / le premier germe

de l'art plastique

前掲箇所, 「我々は以後, 造形芸術を舞踏芸術の娘とみなすことにします」(ebd)。

AL 355/五五九 注(16) 「韻律」

例えば「書簡」で Metrik および metrisch が用いられるのは以下。『シュレーゲル兄弟』, 313, 319, 320頁(それぞれ「韻律上の完全さ」, 「韻律の形式の歴史」, 「韻律の簡単な基本」という箇所)。

AL 356/五六〇 「語り」 Rede / discours

フランス語の用例として, 例えばコンディヤック『人間認識起源論』第二部 §9(邦訳では「お喋り」や「語り」)を参照。古茂田宏訳, 岩波文庫, 下巻, 1994年, 22頁以下, その他49, 55, 70, 157頁などにも文脈に応じて含意は異なるが用例がみられる。

AL 358/五六三 「もっぱらより高度に言語を創り出す……」 ihrer Erfindung nur in höherem Grade... / simplement à un degré plus élevé, dans son invention...

言語の「発明」という問題をめぐっては AL 357/五六一で触れられていた。以下をも参照。コンディヤック『人間認識起源論』邦訳, 21頁; ヘルダー『言語起源論』邦訳, 58頁。

AL 358/五六三 「間投詞」(感嘆詞 die Interjectionen / les interjections)

アウグストの「書簡」(『シュレーゲル兄弟』, 323-324, 329頁), ヘルダー『言語起源論』邦訳, 15頁以下。およびルソー『言語起源論』増田真訳, 岩波文庫, 2016年, 30-31頁をも参照。このあたりの記述について, 『講義』校訂版(KAV, Bd. II/2)の注は本「講義」の「音楽」の節でのルソーへの言及(KAV, Bd. I, S. 373)を指示しているが, 一方そのルソーは『音楽辞典』の「歌」(Chant)の項目で, 「歌は自然なものとは思われない」と述べている。以下を参照。増田真「ルソーの言語論と音楽論における国民とアイデンティティー」, 『人文知の新たな総合に向けて』第2回報告書4(文学篇1(論文)), 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編, 177頁。

同 「情念のたんなる叫び」 die bloßen Ausrufe der Leidenschaften / pures exclamations des passions

上記アウグストの「書簡」参照。コンディヤックの触れる「情念の叫び cri」については『人間認識起源論』邦訳, 17頁以下, ヘルダーによる批判について『言語起源論』邦訳, 24頁以下。および互『言語起源論の系譜』, 192, 281頁。



**AL 358-359**／五六三-五六四 「われわれは……考えを打ち立てた」

講義全集の校注は *KAV*, Bd. I, S. 252-254 (「芸術と自然の関係について、錯覚と真実らしさについて, *Styl* と *Manier* について」) を指示。また, S. 259 (= **AL 347**／五四八), S. 262をも参照。

**AL 359**／五六四 「同様に音楽に……証明した」

Ebd. S. 269.

同 「すでに見たように、朗読における……」

Ebd. S. 252.

**AL 360**／五六五 「言語なしでは一般概念を形成できない……」

ヘルダー『言語起源論』邦訳, 55頁以下, および互, 前掲書, 210, 279頁参照。聾啞者についての議論はコンディヤック『人間認識起源論』第1部第4章第2節(邦訳, 上巻, 187頁以下), およびディドロ『聾啞者書簡』(川野恵子訳, 『美学芸術学論集』神戸大学芸術学研究室, 第17, 18号, 2022-2023年)などにみられる。

**AL 361**／五六七 「歌は、すでに見たように……」

「歌は両者〔=人間が動物と共有する叫び *das Schreyen* と言葉 *das Sprechen*〕の総合であり, 結合である」(*KAV*, Bd. I, S. 374)。

**AL 362**／五六九 「ある盲人は、かつて、赤い色を……」

ジョン・ロック『人間知性論』第3巻第4章, §11(大槻春彦訳, 岩波文庫, 第3巻, 1976年, 121頁)参照。

**AL 365**／五七二 「しばしば言われてきたことだが」

J. G. ハーマン『美学提要』(*Aesthetica in nuce*, 1762)に「詩は人類の母語」とある。『北方の博士・ハーマン著作選』川中子義勝訳, 沖積舎, 2002年, 上巻, 116頁。なお **AL** 原書では p. 364と p. 365が誤って反対に印刷されている。

**AL 365**／五七三 「代数の符号」 *algebraischen Chiffer / signes algébriques*

ヘルダー曰く, 「それらの音は……生命を奪われてしまうなら, 当然, 暗号〔*Ziffern*〕以外の何ものでもない」(『言語起源論』邦訳, 16頁)。

AL 365／五七四 「ビュルガー」

言及されている「原則」は『詩集』第2版の序文にみられる。井上正蔵「ビュルガー管見と詩抄」, 『成城法学教養論集』, 第4号, 1984年, 11頁。

AL 367／五七五 「フランスの批評家たち……」

KAVの注によれば, シュレーゲルが参照しているのはヴォルテール『叙事詩論』(*Essai sur la poésie épique*, 1727)。ミルトンを論じた第9章で, ヴォルテールはフランス語で叙事詩を書くことの困難について語っている。

特性の形成

AL 375／五八八 「いかなる美も……」 *Toute beauté est...*

『花粉』111の断章末尾, 「すべての美しいもの *Alles Schöne*」は本書でもゲルヌの仏訳でも「あらゆる美 *toute beauté*」となっている。

AL 382／五九八-五九九 レッシングの引用

著者たちによる仏訳を踏襲したが, 原文とはやや異なる。「ギリシア人のもとでは, 批評が生まれたとき, 文学は長いこと存在しており, それどころかほとんど [fast] 完成されていた。近代人にとって, われわれドイツ人にとってはなおさら, そうではない。批評と文学はここでは同時に生じた。それどころかほとんど [fast] 前者の方が早く。」

AL 384／六〇三 注(21) 「起源的現象」 *Urphänomen / phénomène originel*

(58) 頁の訳注20に加えて, 以下をも参照。エッカーマン『ゲーテとの対話』邦訳, 中巻, 47, 65, 69, 307頁; ゲーテ『自然と象徴』高橋義人編訳・前田富士男訳, 富山房百科文庫, 1982年, 82頁以下; 「箴言と考察」, 『ゲーテ全集』潮出版社, 第13巻, 1980年, 205-206頁。

「原像」*Urbilder / formes originelles* については『色彩論』ちくま学芸文庫, 17頁; 『ゲーテ形態学論集・動物篇』木村直司編訳, ちくま学芸文庫, 2009年, 146, 164頁。関連して, 「原型 *Typus*」および「原植物 *Urpflanze*」について『ゲーテ形態学論集・植物篇』木村直司編訳, ちくま学芸文庫, 2009年, 36, 290頁; 『イタリア紀行』相良守峯訳, 岩波文庫, 改版, 1960年, 上巻, 85頁, 中巻, 116, 186頁; 下巻, 118頁(「典型」とあるのが *Urbilder*)。

AL 386／六〇五 注(23) フリードリヒの遺稿断片

KFS4, Bd. 18, S. 139, Fr. 209をも参照。「シェリングのジャンル *Gattung* はいずれにも, 死産した子どもが先立っているように思われる——小形式 *Förmchen*, 自我, 自然哲学の諸パラグ

ラフ, 諸イデー, 等々——」。Cf. Tilliette, *Schelling, op. cit.*, p. 414. 最後の「諸イデー Ideen」は1797年の『自然哲学に関する考案』（邦訳『シェリング著作集』第1b巻）を指すか。「自然哲学の一体系への構想序説」, 『太古の夢 革命の夢——自然論・国家論集』, 『ドイツ・ロマン派全集』国書刊行会, 第20巻, 1992年をも参照。

#### AL 388／六〇八 「道徳的絵画」（道徳画）peinture morale

(60) 頁の訳注32に付記すれば, デイドロによるグルーズ評として, しばしば「繊細で感受性に富んだ魂 *une âme délicate et sensible*」という表現が引かれる（例として, 高階秀爾『フランス絵画史』講談社学術文庫, 1990年, 157頁）。しかしサロン評には見当たらず, このままの表現としてはド・ラ・ポルトによる以下の箇所が典拠か。[M. de La Porte,] *Sentimens sur plusieurs des tableaux exposés cette année dans le grand Sallon du Louvre*, 1755, p. 17. 著者については文献・データベースにより情報が異なるが, Joseph de La Porte (1714-1779)と思われる。

デイドロ自身はグルーズについて, 例えば「1761年のサロン」で「彼の構図は知性と繊細さにあふれて [pleine d'esprit et de délicatesse] いる。主題の選択からは, 彼の優れた感性と道徳心とが [de la sensibilité et de bonnes mœurs] うかがえる」と述べている（山上浩嗣「デイドロ『サロン』抄訳（1）」, 2016年, 66-67頁）。

#### AL 388／六〇九 「空想的」fantasques

Ath. 418の文中, この形容詞が充てられているのは「空想の充溢と軽快さ die fantastische Fülle und Leichtigkeit / la profusion et l'aisance fantasques」の下線部だが, 「完全な夢想家 ein vollkommner Fantast / un fantasque parfait」に名詞で用いられている。

### ロマン主義の曖昧

#### AL 419／六五三 「無限に解消する交替」cette alternance infiniment résolue...

引用された遺稿断片冒頭には次のようにある。「全体 Das Ganze は知識欲動 Wissenstrieb の無限性についての反省とともに始まらなくてはならない」。断片内のいくつかの記号は省略した。またドイツ語原文 (KFS4) では「初めから何度でも始まる immer wieder von vorn anfangen のでなくてはならない」とあり, 原語を示した部分がイタリック体で強調されている。

#### AL 420／六五五 「類」Genre / Gattung

シェリングによる用例について, 例えば以下を参照。『シェリング著作集』燈影舎, 第1b巻, 2009年, 292, 295頁 = 『学問論』岩波文庫, 2022年, 281, 286頁; 『シェリング著作集』燈影舎, 第3巻, 2009年, 216 (AL 399／六二五), 305, 312頁。

AL 422／六五九 注（４）

とくに『言葉への途上』における、「同一のもの *das Selbe / le Même, soi*」（邦訳, 297, 330頁 / p. 228, 254）, 「言葉に固有の事態 *die eigene Sache der Sprache / ...en propre ce dont il s'agit avec la parole*」（298頁 / p. 229）, 「眼につき難いものの中でも最も眼につかないもの *das Unscheinbarste des Unscheinbaren / parmi l'inapparent, ce qu'il y a de plus inapparent*」（320頁 / p. 246）, 「もっとも固有の仕方 *die eigenste Weise / le mode le plus propre*」（326頁 / p. 251）といった箇所を参照。参考までに以下の仏訳の該当箇所を邦訳の頁数に添えた。Cf. *Acheminement vers la parole*, Gallimard, 1976 ; coll. « tel », 1996.

AL 424／六六一 「〈同じもの〉の回帰」 *le retour du Même*

参照される L. 124に *symmetrische Wiederkehr des Gleichen* とあり, ニーチェのいう「等しきものの永遠回帰 *die ewige Wiederkehr des Gleichen*」を喚起する。ニーチェは (*die ewige Wiederkunfts-Gedanke*) という表現を用いるが (例えば『この人を見よ』, ちくま学芸文庫, 129頁), ハイデガーは自著『ニーチェ』第2部に掲げる定式に前者をもつてする。ニーチェ自身, 『力への意志』55番 (ちくま学芸文庫, 上, 70頁; 『ニーチェ』平凡社ライブラリー, 上, 516頁に引用; 白水社版『ニーチェ全集』, 第II期第9巻, 278頁) などで *die ewige Wiederkehr* と記している。

AL 424／六六二 「狂気」 *une manie*

以下をも参照。Lacoue-Labarthe, *Le sujet de la philosophie*, p. 176. 『メタフラシス』邦訳, 19, 43, 79頁。

## 訳注篇

### 前口上

(8) 頁 訳注12

参考までにゲルヌによる仏訳を掲げる。« 643. Les couleurs, les sons, la force : la vie est quelque chose comme cela. Le romantique étudie la vie comme le peintre les couleurs, le musicien les sons et le mécanicien la force. L'étude sérieuse de la vie fait le romantique, comme une étude sérieuse et attentive de la couleur et des formes, des sons, de la force fait le peintre, le musicien et le mécanicien. »

(12) 頁 訳注40 「詩制作」 *poësie, poésie* (cf. AL 21／二四)

AL 78, 248-249, 277, 279, 281, 382, 386／一一七, 四〇一, 四〇二, 四四〇, 四四三,

四四五, 五九九, 六〇六。動詞 *poïétiser* の例は AL 380/五九七, 形容詞 (ならびに原書裏表紙の要約文では名詞) としての *poïétique* の用法は AL 51, 69, 73, 76, 279, 381, 419/七四, 一〇三, 一〇八, 一一四, 四四二, 五九八, 六五四。

名詞としての (la) *poïétique* は1937年にヴァレリーが通常の「美学 *esthétique*」を「感覚学 *esthésique*」と「制作学 *poïétique*」という二つの造語によって区分した際にフランス語に導入された。ヴァレリーもまた「詩学 *poétique*」の語源を強調し, 作品の産出に焦点を合わせている。ヴァレリーについて本書ではほとんど言及されないが, AL 9, 384/四, 六〇二に名が挙がる。

ヴァレリー「美学についての演説」佐藤正彰訳, 『ヴァレリー全集』筑摩書房, 第5巻, 増補版, 1983年, 277頁; 「コレージュ・ド・フランスにおける詩学教授」, 同『全集』, 第6巻, 増補版, 1983年, 144頁; 『ヴァレリー集成 III —— 〈詩学〉の探究』田上竜也・森本淳生訳, 筑摩書房, 2011年, 8, 18, 376頁。この文脈については以下をも参照。谷川渥「制作学」, 今道友信編『講座美学3 美学の方法』東京大学出版会, 1984年。

ナンシーは1977年に書かれたバタイユ論で, フロイトを参照しつつ, 神話的な英雄譚の語りの場面を想起しながら「純粋な共同体における自己の純粋な詩制作」を語っている。Cf. Jean-Luc Nancy, « Les raisons d'écrire » [1977], Maurice Blanchot et al., *Misère de la littérature*, Bourgois, 1978, p. 91 ; repris dans *Demande*, Galilée, 2015, p. 52. ラクー=ラバルト『近代人の模倣』邦訳, 157頁をも参照 (加えて276頁には男性名詞としての用法がある; cf. aussi « Typographie », *art. cit.*, p. 205)。形容詞の例として『政治という虚構』邦訳, 174頁; 『虚構の音楽』邦訳, 70, 72, 193頁。

(13) 頁 訳注43 「操作」*opération* (AL 22/二六)

『ハイデガー——詩の政治』邦訳, 67頁, および『メタフラシス』邦訳, 100頁をも参照。

開幕

(16) 頁 訳注8

ニーチェについては以下をも参照。

「遺された断想」(1887年秋-1888年3月) 10 [158] = 『ニーチェ全集』白水社, 第2期第10巻, 1985年, 266頁。

「遺された断想」(1884年秋-1885年秋) 40 [23] = 同『全集』第2期第8巻, 1983年, 462頁。

「遺された断想」(1885年秋-1887年秋) 2 [83] = 同『全集』第2期第9巻, 1984年, 140頁。

(17) 頁 訳注19

クレメンス・ブレンターノがコッツェプーに反駁しロマン主義を擁護するために書いた風刺劇『グスタフ・ヴァーザ』はティークの不興を買い, 怒った後者が「岐路に立つ新たなるヘラ

クレス (Der neue Hercules am Scheideweg)」を著したというエピソードが、カロリーネ・シュレーゲルがシュライアマハーに宛てた1800年6月16日付の書簡にみられる。Cf. Roger Ayrault, *Genèse du romantisme allemand*, tome III, p. 84.

(19) 頁 訳注27

「有機体的全体性」という表現自体は例えば以下にみられる。

*Werke*, Bd. 2, S. 499. 『ヘーゲル初期論文集成』, 540頁。

*Werke*, Bd. 13, S. 42. 『美学』, 前掲邦訳, 第一巻の上, 11頁; 『美学講義』長谷川宏訳, 作品社, 上巻, 1995年, 28頁。

*Werke*, Bd. 9, S. 398, 447. 『法の哲学』藤野渉・赤沢正敏訳, 中公クラシックス, 下巻, 2001年, 215, 315頁 (§ 256, 279)。

ヘーゲルはまた, 『精神現象学』冒頭から何度も体系の叙述 = 描出 = 現前 (Darstellung, présentation) に触れている (*Werke*, Bd. 3, S. 14-15, 22, 27; 樫山訳, 平凡社ライブラリー, 上巻, 20-21, 32, 39頁; 熊野訳, ちくま学芸文庫, 上巻, 16-18, 33, 44頁)。

(20) 頁 訳注30

ナンシーは以下でヘーゲル『法哲学』における君主の問題を論じているが, その際にドゥラテの仏訳を適宜変更しながら用いている。Nancy, « La juridiction du monarque hégélien », Ph. Lacoue-Labarthe et J.-L. Nancy (dir.), *Rejouer le politique*, Galilée, 1981, p. 54. そのドゥラテ訳では, ヴァイルの『ヘーゲルと国家』が参照されている。ただしドゥラテは Wirklichkeit の訳語として実詞 effectivité ではなく réalité effective を採っている。G. W. F. Hegel, *Principes de la philosophie du droit ou droit naturel et science de l'état en abrégé*, trad. Robert Derathé, Vrin, 1979; 2<sup>e</sup> éd. revue et augmentée, 1989, p. ii et 36 n. 8.

## 断片の要求

(22) 頁 訳注8

断章／断片をめぐるノヴァーリスとシュレーゲルの差異について, 以下に本書への異論がみられる。

- Olivier Schefer, *Poésie de l'infini*, La lettre volée, 2001, p. 83-84 et 97.

- Laure Cahen-Maurel, *L'art de romantiser le monde. La peinture de Caspar David Friedrich et la philosophie romantique de Novalis*, Münster/Berlin, LIT-Verlag, 2017, p. 38 et 282.

(22) 頁 訳注14

形容詞 *suivi* については AL 200, 263, 414 n / 三二六, 四一八, 六四七 (注4) をも参照。

(23) 頁 訳注18

ソンディの仏訳では *l'omniscience* が用いられている。Szondi, *PP*, p. 100.

(27) 頁 訳注38

*Faire œuvre de...* というイディオムの例として、以下をも参照。『政治という虚構』邦訳, 140頁。

### 名もなき芸術

(47) 頁 訳注11 「虚構化作用」 *fictionnement*

『虚構の音楽』邦訳, 213頁をも参照。

(48) 頁 訳注15 (AL 271 / 四三一原注への補足)

プラトンの「レクシス」について以下をも参照。『ハイデガー——詩の政治』邦訳, 70頁, および『メタフラシス』邦訳, 55頁。

(52) 頁 訳注42

ノヴァーリス「一般草稿」における *Mystizismus*, *Mystizism*, *Mysticism* の用例として以下。  
782 (『ノヴァーリス全集』沖積舎, 第2巻, 242頁; 『ノヴァーリス全集』牧神社, 第2巻, 248頁; 『断章』岩波文庫, 中巻, 48頁), 788, 906 (『断章』岩波文庫, 上巻, 93頁), 927 (『断章』岩波文庫, 上巻, 103頁), 958, 1008 (『断章』岩波文庫, 中巻, 76頁)。

788に関連する箇所として、「断章と研究 1799-1800」605 (『ノヴァーリス作品集3』, 351頁; 『全集』牧神社, 第2巻, 80頁; 『断章』岩波文庫, 中巻, 19頁)。その他、「テブリッツ断章」85 (『断章』岩波文庫, 中巻, 250頁), 「さまざまな断章」466 (『ノヴァーリス作品集1』, 344頁), 「キリスト教世界, またはヨーロッパ」(『ノヴァーリス作品集3』, 111頁)。

*Mystik* が用いられる「一般草稿」138については『全集』牧神社, 第2巻, 85頁。

### 特性の形成

(55) 頁 訳注1

同様に *le tenant lieu* の例として以下。 *La communauté désœuvrée*, p. 262. 『無為の共同体』邦訳, 207頁。

(55) 頁 訳注2

3 巻本のレッシング著作集 (*Lessings Gedanken und Meinungen aus dessen Schriften zusammengestellt und erläutert von Friedrich Schlegel, Leipzig, 1804*) の構成は以下のとおり。本文で「三つのセクション」(AL 373/五八四) とあるように「書簡断片」の後は大まかに三つに分かたれ、それぞれに序文的テキストが書かれている。以下、\*印はシュレーゲルの文章、括弧内は上記刊本の頁数を示す。

第1巻：

- \* 「フィヒテに」(3-18)
- \* 「総序：批評の本質について」(19-41：『文学的絶対』収録部分)  
「書簡断片 Bruchstücke aus Briefen：前置き Vorerinnerung」(42-64)  
(書簡断片 65-149)
- \* 「あとがき」(149-151)
- \* 「古代についての試論：前置き」(152-158),  
(以下タイトルを欠いて)  
『ラオコーン』の抄録(159-291)  
『ラオコーン』続編の草案と題材からの抜粋(291-319)  
「古代的内容の書簡」からの抜粋(319-324)  
「古代人はどのように死に形を与えたか」(1769)からの抜粋(324-331)
- \* 「あとがき」(331-343)

第2巻：

- \* 「結合術の精神について」(3-19)  
(以下、「演劇論、文学、論争的内容をもつ断片 [Fragmente]」の表題のもとに、「ハンブルク演劇論」の抄録(20-155)、および多数の著作からの抜粋(155-422)。

第3巻：

- \* 「プロテスタントの特性について」(3-22)  
「人類の教育」(23-63)  
「エルンストとファルク」(63-148, 省略・改変を含む)  
「賢者ナータン」(149-406, 「プロローグ」および「エピローグ」としてシュレーゲルの詩作品を含む)
- \* 「エルンストとファルク, フリーメーソンのための第三の対話の断片 [Bruchstück]」(407-422)  
(「哲学の形式について」, 411-422)



シュレーゲルとレッシングの関係、およびこうしたテキストの取捨選択の特徴については以下を参照。胡屋武志「レッシングを演技するフリードリヒ・シュレーゲル」、『ドイツ文学』日本独文学会、152巻、2016年、とくに183頁。および笠原賢介「レッシングとフリードリヒ・シュレーゲル——オリент観をめぐって」、『シェリング年報』第25号、2017年。

上記「エルンストとファルク」は、通常の第1-3の対話が「第一の対話」として、第4-5の対話が「第二の対話」としてまとめられているため、後のシュレーゲルの手になる「断片」が第3の対話に関するものとなっている。酒田健一『フリードリヒ・シュレーゲルの「生の哲学」の諸相』、第5章参照。作品については以下を参照。有川貫太郎訳、『世界文学全集』前掲書；井汲越次訳、『大手前女子大学論集』第2号、1968年～第3号、1969年。

(60) 頁 訳注29 (AL 387/六〇七) 「悲壮味」le pathétique

参考までに、ドラクロワの日記にみられる用法を付記しておく。以下、いずれの箇所も訳語は「悲痛」。

1850年2月24日：『ドラクロワの日記 1822～1850』中井あい訳、二見書房、1969年、262頁。

1854年4月7日：『ドラクロワの日記 1850～1854』中井愛譯、石原求龍堂、1942年、264頁。

その他、1855年3月25日、1856年1月12日、1857年1月23日、1858年2月28日に用例があるが、上記翻訳の訳出範囲には該当しない。

## 閉幕

(63) 頁 訳注3 「漂う、揺れ動く」schweben

その他、ノヴァーリス「一般草稿」1082 (『断章』、中巻、27頁)、「フィヒテ研究」555 (『全集』、沖積舎、第2巻、42頁) などでも用いられている。

(64) 頁 訳注7

mêmeté に関して、著者たちに近いデリダの用法については例えば次の箇所を参照。『ポジシオン』高橋允昭訳、青土社、1981年、17頁；『余白』法政大学出版局、上巻、59頁 (「永劫回帰において差異と反復が同じものであること la mêmeté」)；『余白』、下巻、266頁；『友愛のポリティックス』鶴飼哲ほか訳、みすず書房、2003年、第2巻、286頁。またラクランは「同一化」をめぐるセミナーでシニフィアンの「同じもの性」について語っている (1961年12月6日)。ナンシーによるこの論点については以下の拙論をも参照されたい。「Mémaltération —— ナンシー、同という他化」、『ジャン＝リュック・ナンシーの哲学』読書人、2023年。

その他、著書たちの用例としては例えば以下がある。

ナンシー&ラクー＝ラバルト「政治的パニック」、39,58頁。

ナンシー『エゴ・スム』, 40頁; 『声の分割』, 39頁; 『無為の共同体』, 93頁; 『ヘーゲル』, 38, 78頁; 『ミューズたち』, 160頁; 『複数にして単数の存在』加藤恵介訳, 松籟社, 2005年, 163, 190頁; 『世界の創造あるいは世界化』大西雅一郎・松下彩子・吉田はるみ訳, 現代企画室, 2003年, 20頁; 『肖像の眼差し』岡田温司・長友文史訳, 人文書院, 2004年, 20, 37-39頁; 『イメージの奥底で』西山達也・大道寺玲央訳, 以文社, 2006年, 23頁以下。

ラクー=ラバルト『近代人の模倣』, 35頁; 『経験としての詩』, 谷口博史訳, 未来社, 1997年, 137頁。

## 用語集

### Gemüt

ハイネは、フランス語にはこの語に当たる表現がないと述べている。『ドイツ・ロマン派』邦訳, 37頁。

### Progressiv 「双曲線関数」 la fonction hyperbolique

AL 432/六七四で「双曲線を描いて前進する hyperbolisch fortschreitet」という箇所が「……産物は双曲線関数〔誇張的機能〕である leur produit est une fonction 「hyperbolique」と訳されているのを踏まえている。

## 跋

訳書においては *L'absolu littéraire* なる題をいささか愚直に「文学的絶対」と訳したが、その意図するところを汲むには著者たちの論述を読むに若くはない (AL 21/二四)。ただ、ロマン的イロニーを誇張して発揮させるとすれば、この表現は「たばかりの絶対」くらいに巫山戯て訳しておくべきだったのかもしれない (AL 387/六〇八をも参照)。著者の一人ナンシーが最初期のカント論において、哲学と曖昧な関係を取り結ぶ *littérature* をめぐり、呪われた詩人の一節を冒頭の章の見出しに冠していたことを想起しておくのも益のないことではあるまい。Cf. Jean-Luc Nancy, *Le discours de la syncope. I. Logodaedalus*, Aubier-Flammarion, 1976, p. 25 sq. 最後にそれを掲げておく。

*Que ton vers soit la bonne aventure*

*Éparse au vent crispé du matin*

*Qui va fleurant la menthe et le thym...*

*Et tout le reste est littérature.*

Paul Verlaine, « Art poétique »

連なる詩は冒険であれ

張り詰めた朝風に散り

薄荷・麝香を焚き込め

名残はたかだかの文字

ヴェルレーヌ「詩法」

「願はくは 汝の歌は、薄荷と百里香の

薫濃き花咲かshめて 悴けたる

朝の微風に 飛び散らふ 幸運を得よ……

爾余は みな悉く 維文學。」

(鈴木信太郎譯, 岩波文庫)

## Supplément à la traduction japonaise de *L'absolu littéraire*

Ryosuke KAKINAMI

Le document que nous présentons ici est un « supplément » à la traduction japonaise de *L'absolu littéraire*, ouvrage écrit par les philosophes français Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy : il s'agit d'un choix de textes « théoriques » du premier romantisme allemand, accompagnés de commentaires qui ne peuvent pas rester ignorés, non seulement pour la compréhension du mouvement poético-philosophique d'Iéna et sa réception dans l'espace intellectuel de la France, mais aussi dans le parcours des deux penseurs qui allaient imposer leurs propres noms dans le milieu philosophique de la France et du monde. Notre « document » se constituera de simples « notes » qui, par manque d'espace dans notre traduction, ont été omises ou n'ont pas suffisamment pu être vérifiées pour y être incluses. Espérant, malgré tout, qu'elles soient utiles pour une lecture qui requiert aujourd'hui des connaissances supplémentaires quant à la situation des années 60-70 ou à autant de contextes littéraires et philosophiques, nous nous permettons de les publier, non sans quelque hésitation et, dirions-nous avec une pointe d'ironie, pour des *avenirs* inconnus.